『日本語学論集』第２０号　２０２４年３月

日琉方言の準体形式調査票

小西 いずみ・阪上 健夫・岩﨑 凜太郎・河本 健汰
陳 港・西川 由佳・朴 校演・平井 偉在耶・福田 建

1　はじめに

本稿では、筆者らが編んだ、日琉諸方言（日本語族 Japonic に属する地理的言語変種）の準体形式の記述・対照のための調査票について解説する[1]。ここで「準体形式」とするのは、本来は名詞句（体言）でない言語形式を名詞句相当（準体句）にする形態的手段のことである。

(1) きのう買った<u>の</u>を見せて。
(2) ひとりで行く<u>の</u>はいやだ。
(3) 太郎が来る<u>ん</u>じゃないよ。花子が来る<u>ん</u>だよ。
(4) 私、明日は来ないよ。用事がある<u>ん</u>だ。

現代日本語共通語（以下「共通語」）では、(1)〜(4)のように「ノ」やその異形態「ン」が、準体化機能を担う汎用性の高い助詞として用いられる。日本語古代語においては動詞など用言の連体形によって準体句を作ることができる。現代諸方言には、終止形と連体形の対立は失いながらも準体助詞を伴わずに準体化が可能な方言や、「ガ」「ト」など由来の異なる準体助詞を持つ方言がある。

また、準体形式がつくる構文には、(1)(2)のように、統語的にも意味的にも名詞句相当とみなせるもののほか、(3)(4)のように、コピュラ（上の「だ」「じゃ（ない）」）を後接する点で統語的に名詞句相当ではあるが、他の統語的性質や意味からは名詞句相当とは言い難いものがある。

これらは先行研究ですでに知られていることだが、各方言において、準体形式のバリエーションがどのような要因で使い分けられているのかについては、不明な点が多い。比較

[1] 調査票は小西の researchmap (https://researchmap.jp/ikonishi)「資料公開」からダウンロードできる（2024 年 3 月現在）。

的詳しい記述のある方言についても、一部の用法については情報が欠けており、対照ができないことがある。そこで、準体形式の諸用法と使い分けに関わる要因をできるだけ網羅し、日琉諸方言の準体形式の記述・対照のための土台となる調査票を作成、提案することとした。

次の 2 節では改めてこの調査票作成の背景と経緯を述べ、3 節で調査票について解説する。3 節では、まず調査票全体の構成を示し、次にその下位構成や観点、具体的な質問項目について、いくつかの方言の言語事実をまじえて解説する。4 節は結語である。

2　背景と経緯

この調査票は、2023 年度東京大学大学院人文社会系研究科の授業科目「日本語方言の記述的研究」（小西担当）において検討を重ね、作成したものである[2]。

日琉諸方言の準体形式のバリエーションを知る基礎資料として、『方言文法全国地図』とそのデータ集がある（国立国語研究所 1989-2006, 2018 ; 以下、データ集も含めて GAJ と呼ぶ）。該当項目を(5)に示す。また、彦坂（2006）は、GAJ の主要項目にもとづいて準体形式の変異・分布をまとめ、中央語史を参照しながら各形式の由来や分布形成について考察している。

(5) GAJ における準体形式の図・項目（Q は地図化されていない項目の番号）

a. モノ名詞句やコト名詞句

16 図「（ここに）有る［のは］」

18 図「行く［のに］（便利だ）」

342, 339 図「私［の］です」（O, B 場面）（Q243-A　A 場面）

52 図「百円ぶん（ください）」[3]

b. 述語句形成（いわゆる「ノダ文」）

17 図「行く［のでは］（ないか）」

238 図「行くのだろう　cf. 237 図「行くだろう」

295, 296 図「（あの先生は）行くのか」

Q156「おれが行くんだ」

Q169「役場に行ったのだろう」

---

[2] この授業科目では 2021 年度に命令・禁止表現の調査票、2022 年度に疑問文・疑問表現の調査票を作成し、調査結果データとともに公開している（小西ほか 2022a, 2022b, 2023a, 2023b）。特に疑問文・疑問表現についての調査票は「行くの？」「行く？」のような疑問文末における準体／非準体の対立も詳しく扱っており、本稿で紹介する調査票を補う面がある。注 11 も参照。

[3] 共通語では準体助詞を用いないが方言によっては準体助詞や「属格＋準体助詞」と同形の形が用いられる。3.2 節「分量」の項を参照。

Q246-O, A「どこへ行くのか」（O, A 場面）
Q192「これで良いのかな」

c. 連用従属節の形成
37 図「子どもな［ので］（わからなかった）」
40 図「植えた［のに］（枯れてしまった）」
132-135, 144 図「起きるなら」～「するなら」、「高いなら」[4]

(5)からうかがえるように、GAJ の項目は準体形式の主要な用法を含めてはいるが、後述の「分裂文」など欠けているものが多い。また、述語の品詞やテンスなどの言語的要因も十分に統制されていない。

(5b)の共通語の「ノダ」相当形式に重点を置いた調査票として、舩木（2009）のものがある。これは(6)のように構成されている。

(6) 舩木（2009）「「のだ」相当形式による文末表現」の調査票
Ⅰ. 対事的ムードの「のだ」・関係づけ
Ⅱ. 対事的ムードの「のだ」・非関係づけ（実情理解）
Ⅲ. 対人的ムードの「のだ」・関係づけ（実情説明）
Ⅳ. 対人的ムードの「のだ」・非関係づけ（行為指示）
Ⅴ. いわゆる強調の「のだ」
Ⅵ. スコープの「のだ」
Ⅶ. その他：複数の形式がある場合の使い分けの確認、格助詞・準体助詞の確認

舩木の調査票は GAJ のほか、共通語や諸方言の記述的研究をふまえたもので、用法の別や体系性にも配慮されている。しかし、野田（1997）の記述枠組みに準じたⅠ～Ⅳと、Ⅴの「強調の「のだ」」との関係が分かりにくい。また、ノダ相当形式の調査票であるため、他の準体形式の調査項目はⅦ「その他」として一部扱われているものの、不十分である。

前述の授業では、こうした GAJ と舩木の調査票の構成と問題点をまず確認したうえで、準体形式に関する先行研究を講読してふまえるべき観点を抽出し、調査票の試行版を作成した。その後、参加者（本稿の筆者）それぞれが各地の方言を対象に試行版調査票を用いた調査を行って結果を報告しあい、細部の改訂を行ったものを「日琉方言の準体形式調査票 v.1」として 2024 年 1 月 10 日に公開した[5]。本稿で提示するのは、第 1 版に対する諸氏

[4] 共通語のナラによる仮定節は準体助詞ノを伴うかどうかが任意である。3.2 節「5. 述語句：従属節」の項を参照。
[5] 公開媒体は注 1 と同じ。この第 1 版の構成・内容について阪上を筆頭として「言語学フェス 2024」において発表した。

からの意見・教示や、筆者らのその後の調査結果をふまえ、若干の項目の追加や変更を経たものである。

GAJ、彦坂（2006）、舩木（2009）以外の授業時の講読文献、および、調査票作成において参考にした文献を以下に示す[6]。

【現代日本語共通語の準体形式】日本語記述文法研究会 2003: 5 章 2 節、同 2008: 2 章 2 節、野田 1997、野間 2022、田野村 1990

【準体形式の理論的研究】黒田 2005: 9 章、Shibatani 2017

【日本語中央語史における準体形式】近藤 2000: 7 章、青木 2016: 5-9 章、同 2018、坂井 2015、同 2016、同 2019c

【日琉諸方言における準体形式】松丸 1999、村田 2003、野間 2013、同 2014、同 2019、高雄 2014、坂井 2012、同 2019b、平塚 2019

3 節における調査票の構成・項目の解説では、調査票作成・改訂の過程で行った筆者らによる調査の結果にも触れる。表 1 に対象とした方言と地域・話者情報等を示す。話者は奈良田方言を除き中～若年層である。

表 1. 調査対象の方言

方言名［略称］	地域	話者生年・性	話者情報補足	報告者
会津方言［会］	福島県河沼郡	1999 年・男	18 歳以降は福島県外在住	福田
奈良田方言［奈］	山梨県南巨摩郡早川町奈良田	1934 年・男		小西
富山市方言［富］	富山県富山市	1973 年・女	話者＝報告者。19 歳以降は富山県外在住	小西
越前市方言［越］	福井県越前市	1999 年・女	18-22 歳は福井県外、22 歳以降は福井県坂井市在住	西川
摂津方言［摂］	大阪府大阪市 大阪府大阪市・高槻市、兵庫県西宮市	1963 年・女 1998 年・男	41 歳以降は摂津域内の他地域在住 19 歳以降は摂津域外に在住	岩﨑 陳
広島市方言［広］	広島県広島市	1971 年・女		河本
佐世保方言[7]［佐］	長崎県佐世保市	1999 年・男	3-8 歳と 18 歳以降は長崎県外在住	平井
熊本市方言［熊］	熊本県熊本市	1993 年・男	18 歳以降は熊本県外在住	阪上

[6] 授業時の講読文献でなく、調査項目検討において直接に参照した文献でないものは、研究史上重要であっても挙げていない。2000 年代以前の主要参考文献は、野田（1997）、近藤（2000：7 章）、舩木（2009）に詳しいので参照されたい。

[7] 現在の佐世保市域のうち旧.北松浦郡の大部分を除く地域の言語。原田（1983）や門屋（2018）が長崎県の方言区画の一つとして認めた「佐世保方言」にあたる。

3　調査票の構成と内容

3.1　構成

調査票は、csv および xlsx（MS-Excel）形式のテーブル型データとして公開している（図1）。次の 5 つの部と付録項目で構成される。

1. 非述語句
2. 述語句：スコープ
3. 述語句：ムード
4. 述語句：他の形式名詞の用法
5. 述語句：従属節

付. 関連する格助詞

調査項目は合計で 140 余項目ある。いずれも、共通語の例文（調査票では「質問文」）を各地方言に翻訳してもらう項目である。調査票では優先度を◎、○、△の記号で指定している。◎が最優先項目で、おおまかな体系把握のために最初に一通り確認するとよいものであり、合計 30 項目（付録項目以外では 25 項目）である。○、△は対象方言によっては必要となる項目や、余裕があれば調査・記述することを意図した項目である。

一部の項目では、独話としての発話や、丁寧形に接続する形を求めているが、そうした指定がされていない限り、友達など親しい同等の人を聞き手とするくだけた発話を求めることを想定している。

	A	B	C	D	E	F	G	H
1	No.	大項目	中項目	小項目	優先度	質問文	備考	参考
2	1	1. 非述語句	モノ代替	動詞・非過去	◎	そこに有る【の】をとって。	日琉諸語では該当しないと思われるが、用言に属格が付く場合は「V+属格＋準体助詞」の適格性も確認する	GAJ16図
3	2	1. 非述語句	モノ代替	動詞・過去	○	きのう買った【の】を見せて。		
4	3	1. 非述語句	モノ代替	形容詞・非過去	○	もっと安い【の】がほしい。		
5	4	1. 非述語句	モノ代替	形状詞・非過去	○	もっときれいな【の】がほしい。	近世上方語では形状詞の場合にゼロ準体となりやすい（坂井2015）	
6	5	1. 非述語句	モノ代替	1人称＋属格	◎	私【の／*のの】は机の上にあるよ。	「N＋属格＋準体助詞」の適格性を確認する。「私のが」（土佐方言）など適格な方言もある。	GAJ342図

図 1. 調査票の一部

3.2 各部の観点と項目

以下では、代表的な項目を示しながら調査項目設定の意図・観点を述べる。調査票の掲載順序とは異なるが、まず、主に格についての項目で構成される付録の部をとりあげ、その後、本編である 1「非述語句」から 5「述語句：従属節」について解説する。

付 1. 属格、付 2. 主格、付 3. 対格

格形態、特に属格から準体助詞を発達させた方言が多いこと、また、属格と主格が同形の方言も多いことから（大野 1983、1984、彦坂 2006）、準体形式の調査に先立って格体系の概略を把握する必要がある。

共通語の準体助詞ノは属格助詞ノと同源であり、北陸や高知方言の準体助詞ガも、通時的には属格助詞に由来すると思われる。また、中央語において古代には属格助詞ガ・ノがあり、前者は主格、後者は属格へと発達したが、現代諸方言においても関東や九州など比較的広い地域で属格・主格ともにノ・ガを用い、その使い分けには名詞句の有生性や尊卑、他動性などが関与している（GAJ 1 集、佐々木 2006、坂井 2019a など）。本調査票ではこれらの要因を考慮し、最低限確認すべき項目を設定している。

[131] それは私の時計だよ。【属格：1 人称・分離可能所有】
[138] 本の表紙が破れた。【属格：無生物・分離不可能所有】
[140] 皿が割れた。【主格：主節・自動詞・無生物】
[141] 花子が来た。【主格：主節・自動詞・人】
[142] 花子が皿を割った。【主格：主節・他動詞・人】　=[145]【対格：無生物】
[143] 花子｛が／の｝割った皿をかたづけた。【連体節・他動詞】
[146] 花子がたかしを蹴った。【対格：人】

[ ]内は調査票の項目番号。以下も同様。

共通語では、[143]のように、連体修飾節の主格としてガとノがある。本調査票の 2 部・3 部で扱う、いわゆるノダ文においては、主格のガをノに替えることができず、その性質はノダ文が名詞文としての性質を失っていることの証左とされている（三上 1953、野田 1997）。ノとガを属格としても主節の主格としても用いる方言においては、ノダ文に相当する構文の名詞性を、ガ・ノ交替によって判断するのが難しくなることに注意が必要である。

1. 非述語句

述語句以外の環境で準体句を作る用法を扱う。下位類（調査票の「中項目」）として「モ

ノ代替」「ヒト代替」「コト代替」「分裂文」「主要部内在型」「同格名詞句を伴う型」「トコロ」「トキ」「分量」を設け、さらに前接の品詞やテンスなどを考慮して項目を設けている。

モノ代替・ヒト代替・コト代替

「モノ代替」「ヒト代替」「コト代替」とは、準体句がそれぞれモノ名詞句、ヒト名詞句、コト名詞句に対応する用法である。これらの項目例を示す。

[1] そこに有るのをとって。【モノ代替：動詞・非過去】
[4] もっときれいなのがほしい。【モノ代替：形状詞・非過去】
[5] 私｛の／*のの｝は机の上にあるよ。【モノ代替：1 人称+属格】
[14] 私は、今入って来た｛??の／人｝に、英語を習った。【ヒト代替：待遇的に中立】
[16] 私は、今入って来た｛の／人｝に、ひどい目にあわされた。
【ヒト代替：侮蔑対象】
[25] ひとりで行くのはいやだ。【コト代替】
[29] この会社の社長が太郎なのは知っている。【コト代替：名詞・非過去】

中央語史や一部の方言において準体助詞が発達する過程では、後述の述語句（ノダ文相当）よりも上のような名詞代替用法において先に準体助詞が用いられるようになること、さらに名詞代替用法のなかでもモノ・ヒト名詞の代替用法においてコト名詞の代替用法よりも先に準体助詞が用いられるようになることが指摘されている（青木 2018、坂井 2019b、2019c など）。表 1 のうち準体形式が Ø（ゼロ形式）の奈良田方言においても、モノ代替の場合は Ø が容認されにくい。

[1] ソコニ　｛アル　モノー／?アルー｝　トッテ　クリョー
　　｛ある　物.対格／?ある.対格｝
「そこにある物をとってくれ」［奈］
[25] ヒトリデ　イカー　イヤドーニ
　　行く.主題
「ひとりで行くのはいやだよ。」［奈］

ヒト代替の場合、共通語では、上の調査項目[14][16]に示すように、指示対象の人の待遇価が低くないと準体助詞を用いにくい。筆者らの調査のうち、富山市方言（主な準体助詞はガ）、越前市方言（ノ・ン・ノン）・摂津方言（ン・ノ・ノン）・広島市方言（ノ）・佐世保方言（ト）・熊本市方言（ト）でも、指示対象を低く待遇すると準体助詞が用いやすい。一方、会津方言では待遇価によらずノが用いられる。

[17] オラ　イマ　ハイッテコラッタノサ　エーゴ　ナラッタダ
「私は今入って来られた｛??の／人｝に英語を習ったんだ。」［会］

上の項目[5]に示すように、共通語では属格助詞ノと準体助詞ノの連接が不適格である。筆者らの調査でも、両者が同形の場合はその連接が許されないが、両者が異なる形式である富山市方言（属格ノ、準体ガ）、佐世保方言（属格ン、準体ト）、熊本市方言（属格ン、準体ト・ツ）ではその連接が適格である。加えて摂津方言ではノンが適格で、これは「属格ノ＋準体ン」と分析できるであろう。ノとンのような同源の形式どうしであれ表層的な形が異なれば「属格助詞＋準体助詞」の連接が許容され、表層的に同一であれば許容されにくいという通方言的な一般則が導けそうである[8]。

[5] ワタシノガ　ツクエノ　ウエ　アルワ　［富］
ボクントワ　ツクエノ　ウエニ　アルバイ　［佐］
オレン｛ト／ツ｝ワ　ツクエノ　ウエニ　アルバイ　［熊］
オレノンワ　ツクエノ　ウエニ　アルヨ　［摂・話者 2］
「私のは机の上にあるよ。」

これに関連して、調査票では下の[12]のような「準体＋属格」の項目を設けている。共通語でもこの場合はノノという連接が可能であり、「属格＋準体」と言う構造が許されないのは単に同音連続を回避するためではないと言える。

[12] （「私が買った傘の色は青だよ」に対して）私が買ったのの色は赤だよ。
【モノ代替：準体助詞＋属格】

近世期上方語や江戸語では、形状詞（いわゆる形容動詞）の準体句、「という（といふ）」の準体句、存在文の主語にあたる準体句において Ø 形式を保持しやすいことが指摘されており（坂井 2015、2019c）、それらを確認するための項目も設けている。

[4] もっときれいなのがほしい。【モノ代替：形状詞・非過去】
[8] （いろいろなリンゴが並んでいる果物屋で店の人に）
王林というのをください。【モノ代替：動詞・非過去・「という」】

[8] GAJ 342 図「私［の］です」（O 場面）でもノン、ント、ノガ、ガト、ガンなどはあるが、*ノノ、*ガガなど重複形は見られない。

[10] ティッシュには、トイレに流せるのもあるよ。

【モノ代替：動詞・非過去・存在文の主語】

[28] 本当はこの部屋がもっときれいなのは知っている。【コト代替：形状詞・非過去】

分裂文

分裂文、すなわち、準体節に意味的に値（指示対象）が不定の項が含まれ、その値を述部で示す構文は、中央語史においても共通語においても上記のモノ代替・ヒト代替などの構造とは区別すべきことが知られている（近藤 2000: 7.4 節、坂井 2016 など）。筆者らの調査でも、下の[14]のようなヒト名詞や、[48][51]のようなトコロ・トキ名詞の代替としては準体助詞や Ø 準体形式が用いられないが、分裂文であれば用いられるという結果が得られている。

[31] 私が買うのはこの本だよ。【分裂文・モノ】

[35] 花子といっしょに行くのは太郎だよ。【分裂文・ヒト】

cf. [14] 私は、今入って来た｛??の／人｝に、英語を習った。

【ヒト代替：待遇的に中立】

[40] 山田がいるのは東京だ。【分裂文・トコロ】

cf. [48] 山田がいる｛*の／ところ｝に私も行きたい。【トコロ】

[41] 田中が帰ってきたのは 3 時だ。【分裂文・トキ】

cf. [51] 田中が帰ってきた｛*の／とき｝までには私も帰っていた。【トキ】

主要部内在型、同格名詞句を伴う型

下の[42][44]のような、準体節の主要部がその節内部の項に一致する「主要部内在型」は、統語論でしばしばとりあげられてきた（黒田 2005 など）。また、[43][45]のような同格用法の属格名詞句を伴う型は主要部内在型に似るが、区別すべきとされる（黒田 2005: 174、近藤 2000: 7 章）[9]。

[42] りんごがむいてあるのを食べた。【主要部内在型・モノ】

[43] りんごのむいてあるのを食べた。【同格名詞句を伴う型・モノ】

[44] 花子は泥棒が逃げていくのをつかまえた。【主要部内在型・ヒト】

[45] 花子の友達の、市役所で働いているのを呼んだ。【同格名詞句を伴う型・ヒト】

トコロ・トキ

[9] 同格名詞句を伴う型を調査項目に加えたのは、調査票第 1 版に対する近藤泰弘氏の教示による。

共通語の助詞ノは場所や時を表す準体句を作ることができない[10]。その点での方言間の異同を確かめるため、上記「分裂文」で比較対象として挙げた[48][51]や下の[49][50]などの「連体節＋トコロ・トキ」の項目を設けている。高知方言話者である福田の内省では、[50]のような完了の局面を表すトコロを準体助詞ガに置換することができる。

[49] 夕飯のしたくをしていた｛ところ／*の｝に、電話が鳴った。
[50] 夕飯のしたくがちょうど終わった｛ところ／*の｝で、電話が鳴った。

分量

GAJ56 図「百円ぶん（ください）」や同図を分析した彦坂（2006）によると、共通語の分量をあらわす「ブン」に相当する形式として、北陸、中四国に属格助詞または準体助詞と同形のノ・ガ（ガ）、九州に「属格助詞＋準体助詞」と同形のガトが分布する。これは共通語の準体助詞ノの用法ではないが、方言によっては準体助詞の用法の範囲になりうると言える。[53]のような属格に接続する「ブン」は、すでに見た[5]「私のは」などの項目と連続する。

[52] みかんを千円ぶんください。【分量：数量詞】
[53] 私のぶんも買ってきて。【分量：1 人称＋属格】

2. 述語句：スコープ

野田（1997）は、共通語の文末のノ（ダ）には、情報構造上の焦点の範囲（焦点域）を拡大する機能を果たす「スコープの「の（だ）」」と、話し手の事態に対する心的態度を表す「ムードの「のだ」」の 2 つがあるとする。2「述語句：スコープ」で扱うのはこのうち前者に対応するものである。[54][57][64]のように主語など事態成立以外に焦点がある場合と、[55][58][65]のように事態成立に焦点がある場合とが、それぞれ準体形式／非準体形式に対応するかどうかを確認するための項目を設けている。

[54] 太郎が｛来るんじゃない／*来ない｝よ。花子が｛来るんだ／??来る｝よ。
【主語に焦点：平叙文・非過去断定】
cf. [55] 太郎は来ないよ。【事態成立に焦点：平叙文・非過去断定】
[57] 太郎が来るんじゃない。たぶん花子が来るんだろう。
【主語に焦点：平叙文・非過去推量】
cf. [58] （花子と一緒に太郎を待っている状況で、花子に）

[10] 上述のように分裂文は別である。

そろそろ来る｛だろう／*のだろう｝。【事態成立に焦点：平叙文・非過去推量】

[64] 今日は花子が来るの？【主語に焦点：真偽疑問文】

cf. [65] 今日は花子は｛来るの／来る｝？【事態成立に焦点：真偽疑問文】

筆者らの調査では、Ø 準体の奈良田方言を含めて対象とした全ての方言で準体形式が焦点域拡大の機能を持つ。下に越前市方言の例をあげる。共通語においても越前市方言においても、否定文のほうが肯定文よりも準体／非準体の対立が明確である。

[54] タローガ　｛クルンヤナイヨ／*コンヨ｝。ハナコガ　｛クルンヤヨ／クルンヨ／クルヨ｝。［越］

[55] ｛タロー／タローワ｝　コンヨ。［越］

山梨・長野・静岡・愛知など中部方言域の推量形ズラ・ダラは、共通語の「名詞＋だろう」「のだろう」に対応する（GAJ 240 図「雨だろう」、238 図「行くのだろう」など）。これらの形式が予想される方言では、上の[57][58]などの項目を用いて、推量形における準体・非準体の対立を確認する必要がある。

また、下の奈良田方言のように、準体形式と非準体形式の対立は平叙文と疑問文とで異なる場合がある。そのために上の[64]など、疑問文の項目も含めている[11]。

[54] タローガ　｛クルジャー　ナイ／*コノー｝ヨ。
来る=コピュラ連用.主題　否定／来る否定
ハナコガ　｛クルドー／クル｝ヨ。
来る=コピュラ／来る
「太郎が来るんじゃないよ。花子が来るんだよ。」［奈］

[64] キョーワ　ハナコガ　クルカー。
来る=疑問終助詞
「今日は花子が来るの？」［奈］

3. 述語句：ムード

野田（1997）の「ムードの「のだ」」に対応する。項目の設計も野田の論にもとづき、

[11] 次に見る 3「述語句：ムード」の場合も含めて、共通語の疑問文末におけるノの有無の対立については野田（1997: 4 章）や林（2020）に詳しい。小西（2023a, b）の調査票はこれらを参照して作成しており、疑問文の準体形式・非準体形式については、本稿で紹介する調査票を補うものである。また、奈良田方言の疑問文については小西（2022）参照。

次のように、2 つの要因の組み合わせによる 4 つに分類している[12]。

関係づけ／非関係づけ：当該事態を発話の状況や先行文脈の事情・意味として関係づけるか否か
対人的ムード／対事的ムード：話し手が既に認識していた事態を聞き手に提示するか、話し手がそれまでに把握していなかった事態を把握するか

[68] 私、明日は来ないよ。用事がある｛んだ／んだよ／*のか｝。【関係づけ・対人】
[72] （独り言で）山田さんが来ないなあ。きっと用事がある｛んだ／*のか｝。
【関係づけ・対事：推量判断】
[74] （聞き手の前で、聞き手がたばこを吸うのを見て）
あ、おまえ、たばこを吸う｛んだ／のか｝。【関係づけ・対事：眼前の事態】
[80] ランプが点いたら、このスイッチを押す｛んだ／んだよ／*のか｝。
【非関係づけ・対人：命令用法・タイミング非考慮】
[81] さあ、このスイッチを押す｛んだ／*のか｝！
【非関係づけ・対人：命令用法・タイミング考慮】
[87] （友人に昨日の出来事を話しはじめる）
昨日、新宿に行ったんだよね。そしたら、… 【非関係づけ・対人：話題展開】
[90] （独り言で）そうか、このスイッチを押す｛んだ／のか｝。【非関係づけ・対事】

先行研究では、特に対人用法と対事用法とで用いられる形式に違いがある方言があることが指摘されている。例えば、関西方言では対人用法で、準体助詞とコピュラを分析できないネン、対事用法でンヤ・ノヤ（準体助詞＋コピュラ）が使われやすいとされている（松丸 1999、野間 2013）。筆者らの摂津方言の調査でも同様である[13]。

[68] ワタシ　アシタ　ケーヘンヨ。ヨージ　アンネン。
「私、明日は来ないよ。用事があるんだ。」［摂・話者 1］
[74] エー　オマエ　タバコ　スーンヤ
「えー、お前、煙草を吸うんだ。」［摂・話者 1］

---

12 「非関係づけ」の命令用法の「タイミング考慮」などの用語は井上（1993）による。
13 「関係づけ・対事」のうち[72]のように推量判断を表す場合は、「のだろう」に当たる準体推量形が用いられ、「のだ」にあたる準体断定形が用いにくい方言がある。筆者らの調査では奈良田方言、富山市方言、摂津方言など複数の方言でそうである。その場合は[74]のように眼前の事態について述べる項目でも確認する必要がある。

「準体形式＋コピュラ」が対人用法で用いられるかどうかという点では方言差があり、会津方言・越前市方言では可能だが、上に述べた摂津方言のほか、奈良田方言・富山市方言・広島市方言・佐世保方言・熊本市方言では用いにくく、準体助詞言い切り（富・熊）、「準体助詞＋コピュラ＋終助詞」（奈・佐）、「準体助詞＋終助詞」（広・佐・熊）が用いられる[14]。

[68] オレ　アシタ　コネ。ヨージ　アンダ。
　　ある=コピュラ[15]
「私は明日は来ないよ。用事があるんだ。」［会］

ワタシ　アシタワ　コナイヨ。ヨージガ　アルン｛ヨ／*ジャ｝[16]。
　　ある=準助=｛終詞／*コピュラ｝
「私は明日は来ないよ。用事があるんだよ（lit. あるのよ）。」［広］

オレ　アシタワ　コンバイ。ヨージガ　アル｛ツタ／ト／*トダ｝。
　　ある｛準助=終助／準助／準助=コピュラ｝
「私は明日は来ないよ。用事があるんだよ（lit. あるのよ／あるの）。」［熊］

調査項目では、動詞・非過去形だけでなく、動詞・過去、名詞・非過去の項目も含めている。動詞・過去については、関西方言に過去接辞と準体助詞を分析できない「テン」があることが知られている。

[69]（昨日、どうして来なかったのか聞かれて）
用事があった｛んだ／んだよ／*のか｝。【関係づけ・対人：動詞・過去】

また、準体形式の基本的機能が名詞化（体言化）であることから、共通語の「なのだ」のような名詞述語にさらに準体助詞を付けた形式は、動詞など用言の準体形式より

[14] 佐世保方言と熊本市方言では、前掲[74]のような対事的ムードを表す文でも「準体形式＋コピュラ」で終止しにくい。非過去の名詞文におけるコピュラの生起に方言差があり、特に肥筑方言域においてコピュラによる文終止が見られないことについては、白岩ほか（2016）の論がある。

[15] 「ヨージ　アッタダ」（用事があるんだ）など他の項目でØ準体形が得られていることから、この「アンダ」を、アルにコピュラ「ダ」が後接したØ準体形と解釈したが、「スイッチ　オスンダ」（スイッチを押すんだ）など準体助詞ンも得ていることから、「アル＋準体助詞ン＋ダ」の縮約形という可能性もある。

[16] 項目[68]では「アルンジャー」というコピュラ長音形も容認されるが、この項目でも他の対人用法の項目でも「ヨージガ　アルンヨ」（用事があるんだよ（lit. あるのよ））など、準体助詞に終助詞が続く形式が優先される。

も用いにくい。この調査票では、関係づけの[70]、非関係づけで、聞き手の知らない情報を提示する[89]のように、共通語において非準体の名詞文に置き換えにくい例文を選んでいる。

[70] おまえは怖がりすぎなんだ。【関係づけ・対人：名詞・非過去】
[89] 私、明日はデートなんだ。
【非関係づけ・対人：名詞・非過去、聞き手の知らない情報を提示】

共通語の準体形式の過去形「のだった」には、対事的な用法として「想起」「後悔」を表す場合がある（野田 1997）。

[91] あ、思い出した。今日は花子が来るんだった。【対事「のだった」：想起】
[92] こんなことなら、早く出発するんだった。【対事「のだった」：後悔】

共通語では丁寧形マス・デスにノが後接することができる（野田 1997:28）。調査項目ではこうした項目も含めているが、丁寧形自体が慣用的でない方言もあり、調査・記述の優先度は低い。

[94] どこに行きますの？【丁寧形への接続】
cf. 行くの？／行くんです（か）？

本調査票では、意味的にも形態統語的にもモノ・コトなどの名詞句に相当する構造をつくるものを 1 部「非述語句」で扱っているが、厳密には下の[100]のように、モノ代替の準体形式が述語句で用いられることもある。共通語・東京方言では、スコープ・ムードの「の（だ）」はノよりもンが自然であるが、[100]のようなモノ代替ではンが不適格である。また、野間（2019）によると準体助詞トを用いる甑島里方言では、[100]のようなモノ代替の準体句にコピュラ「ヤイ」が後接した場合はトヤイの音変化形チャイが用いられ、[99]のようなノダ文相当ではチャイに加えてサイ、タイという原形からより離れた形も用いられるという。このように準体形式にコピュラが続く場合の形態的変異、その用法間の異同を確認するための項目を、便宜的にこの 3 部の末尾に設けている。

[99] （相手に色の違いを説明する）
こっちの方が色が白いんだよ。【コピュラへの接続：ムードの「のだ」】
[100] （「花子の鉛筆はどれ？」と聞かれて）
あそこにある白い｛の／*ん｝だよ。【コピュラへの接続：モノ代替】

4. 述語句：他の形式名詞の用法

1 部「非述語句」では共通語において準体助詞ノに置き換えにくい「連体節＋トコロ・トキ」についても含めた。それに平行して、4 部では、主に日本語記述文法研究会（2003）を参考に、共通語において形式名詞モノ・コト・ワケ・トコロにコピュラを後接する構文の主要なものを項目として設ける。一部を下にあげる。

[103] 若者は無茶をする｛ものだ／*んだ｝。【モノダ：本質・傾向】
[107] 勝ちたいのなら、毎日練習する｛ことだ／*んだ｝。【コトダ：助言・忠告】
[109] 今日は祭りか。人が多い｛わけだ／*んだ｝。【ワケダ】
[110] 今からうどんを食べるところだ。【トコロダ：局面】
[113] もう少しで崖から落ちる｛ところだった／*んだった｝【トコロダッタ・反事実】

富山市方言では[113]で、「準体助詞ガ＋コピュラ過去形」にあたる「オチルガダッタ」を用いることができる。GAJ 203 図によると他にも「準体助詞＋コピュラ過去形」を用いることができる方言がある。

5. 述語句：従属節

共通語の「ので」「のだから」など、準体助詞が連用従属節を構成する形式がある。5 部として、このような連用従属節が慣用的かどうかを確認する項目を設けた。最優先項目を下に示す。

[117] 雨が降るので やめた。【理由節・ノデ】
[118] こんなに雨が降ったんだから、中止にしろ。【理由節・ノダカラ】
[123] 木を植えたのに枯れてしまった。【逆接節・ノニ】
[124] 今度飲み会やるんだけど、あなたも来ない？【逆接節・ノダケド】
[128] 来る｛のなら／なら／んだったら｝、まず電話して。【仮定節】

[118]のノダカラによる理由節、[124]のノダケドによる逆接節は、それぞれ「降ったから」「やるけど」のような、非準体の理由節・逆接節と対立するものである。

共通語において認識的条件（有田 2007）を表すナラ仮定節は、準体助詞の有無が任意であるが、方言によっては準体助詞を伴う形が用いられる。下は越前市方言と広島市方言の例である。

[128] クル｛ンナラ／ンヤッタラ／?ナラ｝…

「来る｛のなら／んだったら／なら｝…」［越］

クルンジャッタラ　マズ　デンワシテー
「来るんだったら、まず電話して。」［広］

その他の要因

同一方言内の準体形式の変異は、これまで見てきたような形態・統語的環境や意味によるほか、音韻環境によっても使い分けられることがある。野間（2014）によると、大阪方言にはン・ノ・ノンがあるが、ノ・ノンは撥音に後接する場合に用いられる[17]。筆者らの摂津方言の調査でも同様のことが指摘できる。高雄（2014）も広島方言においてンが基本だが撥音前接時にノが用いられるとしている。

4　おわりに

本稿では、筆者らが作成した、日琉諸方言の準体形式の記述・対照のための調査票について、この調査票を用いた調査で得たデータをまじえながら解説した。

本調査票の電子ファイルは、クリエイティブコモンズの「表示-非営利 4.0 国際」（CC BY-NC 4.0）により公開している。すなわち、非営利目的であれば適切なクレジットを表示することにより、改変や再配布も可能である。この調査票を利用して記述・対照が進展するとともに、この調査票が見落としている観点を盛り込んだり、より適切な例文に差し替えたりと、さらに改良した調査票が考案されることを願っている。

参考文献

青木博史（2016）『日本語歴史統語論序説』東京：ひつじ書房

青木博史（2018）「準体助詞「の」の発達と定着：文法化の観点から」高田博行・小野寺典子・青木博史（編）『歴史語用論の方法』pp.141-165. 東京：ひつじ書房

有田節子（2007）『日本語条件文と時制節性』東京：くろしお出版

井上優（1993）「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」：命令文・依頼文を例に」『国立国語研究所研究報告集』14: 333-360.

大野小百合（1983）「現代方言における連体格助詞と準体助詞〈その一〉」『日本学報』2: 27-66.

大野小百合（1984）「現代日本語方言における種々の準体助詞の成立について：現代方言における連体格助詞と準体助詞〈その 2〉」『日本学報』3: 63-84.

[17] 野間（2014）は形容詞非過去イ形の後にもノ・ノンが用いられやすいとする。ンを用いると /(C)Vin/という超重音節が生じるため、その回避のためにノ・ノンが用いられると推測できる。そうであれば、これも音韻環境によるものと言える。

門屋飛央（2018）「長崎県佐世保市宇久町方言」方言文法研究会（編）『全国方言文法辞典資料集 (4) 活用体系(3)』（科研費報告書）pp. 97-106.

黒田成幸（2005）『日本語からみた生成文法』東京：岩波書店

国立国語研究所（編）（1989-2006）『方言文法全国地図』全 6 巻．東京：大蔵省印刷局／財務省印刷局／国立印刷局

国立国語研究所（編）（2018）「方言文法全国地図全データ」https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj_all/gaj_all.html［2024.2.14 閲覧］

小西いずみ（2022）「山梨県奈良田方言の疑問文：準体助詞のない方言におけるスコープ、事態既定性」『日本語文法学会 第 23 回大会発表予稿集』pp. 1-8.

小西いずみ・足立研二・大島英之・髙城隆一・田中智章・中鉢絢貴・中澤光平（2022a）「日琉方言の命令・禁止表現（調査報告）」『日本語学論集』18: (51)186-(111)126.

小西いずみ・足立研二・大島英之・髙城隆一・田中智章・中鉢絢貴・中澤光平（2022b）「日琉方言の命令・禁止表現:調査票とデータ集」https://doi.org/10.5281/zenodo.6379988

小西いずみ・小田幸生・小幡幸輝・阪上健夫・竹林栄実・山本久（2023a）「日琉方言の疑問文・疑問表現調査票」『日本語学論集』19: (34)127-(49)112.

小西いずみ・小田幸生・小幡幸輝・阪上健夫・竹林栄実・山本久（2023b）「日琉方言の疑問文・疑問表現:調査票とデータ集」「同(2)」https://doi.org/10.5281/zenodo.7763408, https://doi.org/10.5281/zenodo.7763425

近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』東京：ひつじ書房

坂井美日（2012）「現代熊本市方言の準体助詞：「ツ」と「ト」の違いについて」『阪大社会言語学研究ノート』10: 30-47.

坂井美日（2015）「上方語における準体の歴史的変化」『日本語の研究』11(3), 32-50.

坂井美日（2016）「上方語における分裂文の歴史的変化」青木博史・小柳智一・高山善行（編）『日本語文法史研究 3』pp. 131-153. 東京：ひつじ書房

坂井美日（2019a）「熊本市方言の格配列と自動詞分裂」竹内史郎・下地理則（編）『日本語の格標示と分裂自動詞性』pp. 37-66. 東京：くろしお出版

坂井美日（2019b）「南琉球宮古語における準体の変化に関する考察」『方言の研究』5: 213-238.

坂井美日（2019c）「上方語と江戸語の準体の変化：2 つの変化の相違点と共通点」金澤裕之・矢島正浩（編）『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』pp. 228-251. 東京：笠間書院

佐々木冠（2006）「格」小林隆・佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂『シリーズ方言学 2 方言の文法』pp. 1-46. 東京：岩波書店

白岩広行・平塚雄亮・酒井雅史（2016）「繋辞生起の方言差」『日本語文法』16(2): 94-110.

高雄芙美（2014）「標準語・関西方言との比較からみる広島方言の「のだ」形式」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』14: 125-141.

田野村忠温（1990）『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』大阪：和泉書院

日本語記述文法研究会（編）（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』東京：くろしお出版

日本語記述文法研究会（編）（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部複文』東京：くろしお出版
野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』東京：くろしお出版
野間純平（2013）「大阪方言におけるノダ相当表現：ノヤからネンへの変遷に注目して」『阪大日本語研究』25: 53-73.
野間純平（2014）「大阪方言における準体助詞ン・ノ・ノン：ノンの分布を中心に」『阪大社会言語学研究ノート』12: 24-36.
野間純平（2019）「甑島里方言のノダ相当形式にみられる音変化：他方言と対照して」窪薗晴夫・木部暢子・高木千恵（編）『鹿児島県甑島方言からみる文法の諸相』pp.249-271. 東京：くろしお出版
野間純平（2022）「現代日本語における準体助詞「ノ」と「ン」」『国語と国文学』99(5): 98-110.
林淳子（2020）『現代日本語疑問文の研究』東京：くろしお出版
原田章之進（1983）「語彙の面より見た長崎県の方言区画」『活水論文集 日本文学科編』26: 29-56.
彦坂佳宣（2006）「準体助詞の全国分布とその成立経緯」『日本語の研究』2(4): 61-74.
平塚雄亮（2019）「福岡市方言の準体助詞にみられる言語変化」『中京大学文学会論叢』5: 88-71.
舩木礼子（2009）「強調・説明の表現：「のだ」相当形式による文末表現」国立国語研究所全国方言調査委員会（編）『方言文法調査ガイドブック 3』pp. 49-62. 東京：国立国語研究所
https://www2.ninjal.ac.jp/takoni/DGG/DGG3.pdf［2024.2.14 閲覧］
項目データベース https://www2.ninjal.ac.jp/takoni/DGG/DGG_index.htm［2024.2.14 閲覧］
松丸真大（1999）「京都市方言における「ノヤ」「ネン」の異同」『阪大社会言語学研究ノート』1: 61-73.
三上章（1953）『現代語法序説：シンタクスの試み』東京：刀江書院（復刊 くろしお出版, 1972 年）
村田真美（2003）「宮崎方言の「チャ」と「ト」」『阪大日本語研究』15: 109-129.
Shibatani, Masayoshi (2017) Nominalization. Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda (ed.) *Handbook of Japanese Syntax*. pp.271-331. De Gruyter Mouton.

謝辞

ご協力くださった各地方言の話者の皆さま、調査票の公開第 1 版に対し「言語学フェス 2024」その他の機会においてご意見をくださったかたがたに、感謝します。本研究は JSPS 科研費 17K02777, 19H01255, 20H00015, 20K20704, 21K18376, 22K00598, 23H00007 および国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」の助成を受けたものである。

（こにし　いずみ　大学院人文社会系研究科　准教授）
（さかがみ　たけお　大学院人文社会系研究科　博士課程 1 年）
（いわさき　りんたろう　大学院人文社会系研究科　修士課程 1 年）
（かわもと　けんた　大学院人文社会系研究科　修士課程 1 年）
（ちん　こう　大学院人文社会系研究科　修士課程 1 年）
（にしかわ　ゆか　大学院人文社会系研究科　修士課程 1 年）

（ぱく　ぎょよん　大学院人文社会系研究科　研究生）
（ひらい　いざや　大学院人文社会系研究科　修士課程 1 年）
（ふくだ　たけし　大学院総合文化研究科　修士課程 1 年）